

木質研究

第八号

木  
簡  
研  
究  
室

第  
八  
号



木  
簡  
學  
會

題字 藤枝見刻

## 卷頭言——最後まで残る仕事···

## 目

## 次

青木和夫···

## 一九八五年出土の木簡···

## 概要

## 凡例

## 奈良・平城宮・京跡

## 奈良・平城京左京三條六坊七坪

## 奈良・平城京右京七條一坊十五坪

## 京都・長岡京跡(1)

## 京都・長岡京跡(2)

## 京都・長岡京跡(3)

## 京都・平安京左京三条三坊十一町

## 京都・平安京右京九條三坊十四町

## 京都・平安京右京八条二坊二町

辻 小 平 森 裕 司	平 尾 政 寛	寺 島 俊	吉 築 伸	上 村 和	清 み	中 井 公	東 潮 公	橋 本 義	東 一	野 治 之	吉 村 正	1
27 26 25 24	22 21 16 15	13	7	4								

京都・長岡京跡	京都・平安京右京八条二坊五町	京都・烏羽離宮跡	京都・伏見城跡	大阪・西ノ辻遺跡	大阪・親音寺遺跡	大阪・大藏堂施寺	大阪・總額遺跡	兵庫・玉津田中遺跡	兵庫・辻井遺跡	兵庫・長尾冲田遺跡	兵庫・但馬国府推定地	愛知・朝日西遺跡

佐 吉 藤 譲	大 平 雅	山 本 仁	山 本 茂	山 本 博 利	山 本 博 利	高 橋 雅	高 橋 由	近 藤 利	近 藤 利	吉 村 正	吉 村 正	1
44 42 41 40	39 37 36 35	34	33	32	30							

愛知・大瀬遺跡  
 爰知・沓掛城跡  
 静岡・勝間田城跡  
 静岡・神明原・元宮川遺跡  
 神奈川・今小路周辺遺跡  
 神奈川・鶴岡八幡宮境内研修道場用地遺跡  
 滋賀・鹿島湖岸北部条里遺跡  
 滋賀・西河原森ノ内遺跡  
 滋賀・勸学院遺跡  
 滋賀・金剛寺城跡  
 滋賀・柿堂遺跡  
 檜木・法界寺跡  
 宮城・今泉城跡  
 宮城・富沢水田遺跡  
 岩手・中尊寺伝三重池跡  
 岩手・胆沢城跡  
 青森・浪岡城跡

一九七七年以前出土の木簡（八）

奈良・平城宮跡（第一四次）

鬼頭清明

105

木村 腹健司	宮腰健司	木村 光一	宮腰健司
及川 司	栗野克己	河野真知郎	栗野克己
河野 真知郎	栗野克己	55	51
新潟・番場遺跡	河野真知郎	55	49
新潟・小鳥西遺跡	新潟・番場遺跡	55	47
福井・一乘谷朝倉氏遺跡	新潟・小鳥西遺跡	55	46
石川・三木だいもん遺跡	福井・一乘谷朝倉氏遺跡	55	46
富山・弓庄城跡	石川・三木だいもん遺跡	55	46
新潟・番場遺跡	富山・弓庄城跡	55	46
新潟・草戸千軒町遺跡	新潟・番場遺跡	55	46
廣島・尾道遺跡	新潟・草戸千軒町遺跡	55	46
廣島・備後國府跡	廣島・尾道遺跡	55	46
和歌山・秋月遺跡	廣島・備後國府跡	55	46
福岡・大宰府跡	和歌山・秋月遺跡	55	46
福岡・大宰府跡坊跡	福岡・大宰府跡	55	46
福岡・豊前國府跡	福岡・大宰府跡坊跡	55	46
福岡・如法寺遺跡	福岡・豊前國府跡	55	46

奈良・平城宮跡（第二五次）

鬼頭清明

106 105

佐藤 清日	佐藤 小善	佐藤 善久	佐藤 圭一
佐藤 清日	佐藤 小善	佐藤 善久	佐藤 圭一
森 重彦	森 重彦	森 重彦	森 重彦
森 重彦	森 重彦	森 重彦	森 重彦
片山 康夫	片山 康夫	片山 康夫	片山 康夫
片山 康夫	片山 康夫	片山 康夫	片山 康夫
鳥谷 芳雄	鳥谷 芳雄	鳥谷 芳雄	鳥谷 芳雄
鳥谷 芳雄	鳥谷 芳雄	鳥谷 芳雄	鳥谷 芳雄
伊藤 敦	伊藤 敦	伊藤 敦	伊藤 敦
伊藤 敦	伊藤 敦	伊藤 敦	伊藤 敦
坂井 秀弥	坂井 秀弥	坂井 秀弥	坂井 秀弥
坂井 秀弥	坂井 秀弥	坂井 秀弥	坂井 秀弥
高慶 孝三	高慶 孝三	高慶 孝三	高慶 孝三
高慶 孝三	高慶 孝三	高慶 孝三	高慶 孝三
下津間 康夫	下津間 康夫	下津間 康夫	下津間 康夫
下津間 康夫	下津間 康夫	下津間 康夫	下津間 康夫
山本 高照	山本 高照	山本 高照	山本 高照
山本 高照	山本 高照	山本 高照	山本 高照
山本 住靖	山本 住靖	山本 住靖	山本 住靖
山本 住靖	山本 住靖	山本 住靖	山本 住靖
石松 好雄	石松 好雄	石松 好雄	石松 好雄
石松 好雄	石松 好雄	石松 好雄	石松 好雄
美 妙彦	美 妙彦	美 妙彦	美 妙彦
美 妙彦	美 妙彦	美 妙彦	美 妙彦

奈良・平城宮跡	鬼頭清明	奈良・平城宮跡(第四三次)	鬼頭清明
奈良・平城宮跡(第四〇次)	鬼頭清明	奈良・唐招提寺講堂地下遺構	和田萃
奈良・平城宮跡(第四一次)	加藤優		
中国簡牘研究の新しい動向	李學勤		
	李學勤		
中國簡牘研究の新しい動向	李學勤	奈良・平城宮跡(第四三次)	鬼頭清明
倉札・札家考	李學勤	奈良・唐招提寺講堂地下遺構	和田萃
袖井遺跡出土木簡の再検討	李學勤		
出土の文字資料からみた中世民衆生活の一面——草戸千軒町遺跡を中心に	志田原重人	秀三郎	李學勤
	志田原重人	秀三郎	李學勤
	秀三郎	志田原重人	李學勤
163	151	135	128
			123
			116 114

凡例

一、以下の原稿は各木簡出土地の発掘機関に依頼して、執筆していただいたものであるが、体裁および訛文の記載形式等については編集担当の責任において調整した。

二、原稿の配列はほぼ奈良時代の五畿七道の順序に準じた。

三、訛文の漢字はおおむね現行常用字体に改めたが、「賣」「證」「龍」「廣」「盡」「應」等については正字体を使用し、異体字は「升」「升」「率」「牘」等についてのみ使用した。

四、訛文下段のアラビア数字は木簡の長さ・幅・厚さを示す（単位はミリメートル）。欠損している場合の法量は括弧つきで示した。その下の三桁の数字は型式番号を示す。またそれぞれの発掘機関での木簡の通し番号は最下段に示した。

五、訛文に加えた符号は次の通りである（六頁第1圖参照）。

「」　木簡の上端ならびに下端が原形をとどめていることを示す。

<　木簡の上端・下端に切り込みのあることを示す。

々々　抹消した文字であるが字画のあきらかな場合に限り原字の左傍に付した。

抹消により判読困難なもの。

□□□ 欠損文字のうち字數が推定できるもの。

□□□ 欠損文字のうち字數の数えられないもの。

× □□□ 前後に文字のつづくことが推定されるが、折損等に

より文字が失われているもの。

「」 異筆、追筆。

「」 合点。

木簡の表裏に文字のある場合、その区別を示す。

「」 校訂に関する注で、原則として訛文の右傍に付し、

本文に書き換えるべき文字を含む場合。

カ 編者が加えた注で疑問の残るもの。

ママ 文字に疑問はないが意味の通じ難いもの。

…… 同一木簡と推定されるが折損等により直接つながらず、中間の文字が不明なもの。

II 組版の関係で一行のものを二行以上に組まなければならなかった場合、行末・行初につけたもの。

図版に写真の掲載されているもの。

一、地形図は原則として国土地理院発行の五万分の一地形図を使用し図名を( )内に示した。地図中の▼は木簡の出土地点を示す。一、訛文の最下段に三桁で示した型式番号は、木簡の形態を示し、

つぎの一五型式からなる（六頁第2図参照）。

011型式 短冊型。

015型式 短冊型で、側面に孔を穿ったもの。

019型式 一端が方頭で他端は折損・腐蝕で原形が失われたもの。

021型式 小形矩形のもの。

029型式 小形矩形の材の一端を主頭にしたもの。

031型式 長方形の材の両端の左右に切り込みをいたるもの。方

頭・圭頭など種々の作り方がある。

032型式 長方形の材の一端の左右に切り込みをいたるもの。

033型式 長方形の材の一端の左右に切り込みをいれ、他端を尖らせたもの。

039型式 長方形の材の一端の左右に切り込みがあるが、他端は折損あるいは腐蝕して不明のもの。

051型式 長方形の材の一端を尖らせたもの。

059型式 長方形の材の一端を尖らせたものであるが、他端は折損あるいは腐蝕して不明のもの。

061型式 用途の明瞭な木製品に墨書のあるもの。

065型式 用途未詳の木製品に墨書のあるもの。

081型式 折損・腐蝕その他によって原形の判明しないもの。

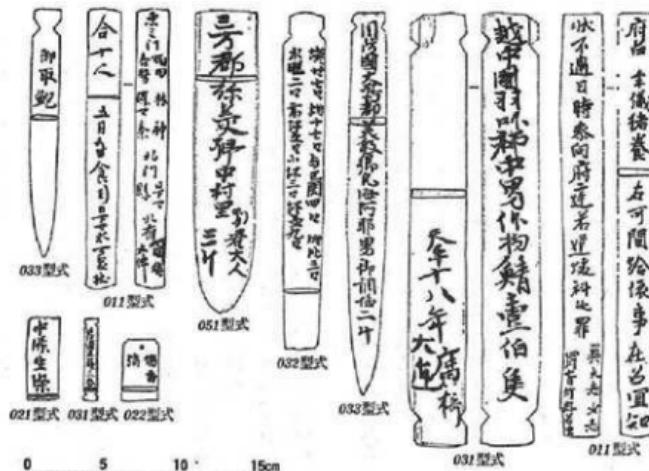
(3)型式 褶肩。

広島・草戸千軒町遺跡出土木簡の型式番号は、広島県草戸千軒

町遺跡調査研究所『草戸千軒—木簡一一』を参照されたい。なおその他の中世木簡については以上の型式番号に適合しないものが多いので、注記を省略したものもある。



第1図 木簡併文の表記法



第2図 木簡の形態分類

木簡学会役員

幹事長	岸 勝男
副会長	大庭 勲
委員長	青木 和夫
委員	門脇 順二
監事	佐藤 宗諱
橋本 義則	坪井 清足
鶴野 和己	原 秀三郎
綾村 宏晃	関 関
町田 章	土田 直鏡
寺崎 保広	直木孝次郎
和田 萃	早川 庄八
	岩本 邦雄
	狩野 久
	田中 琢
	鬼頭 清明
	岡崎 敬
	田中 稔
	東野 治之
	柴原水道男

# 奈良・平城京右京七条一坊十五坪

1985年出土の木簡



(奈良・桜井)

書曲物を据え、この上部に

埋蔵文化財調査報告書 昭和六〇年度(一九八六年)

(中井 公)

- |                 |  |
|-----------------|--|
| 1 所在地           | 奈良市六条町   |
| 2 調査期間          | 一九八五年(昭60)九月~一〇月   |
| 3 発掘機関          | 奈良市教育委員会   |
| 4 調査担当者         | 中井 公・森下恵介  |
| 5 遺跡の種類         | 都城跡  |
| 6 遺跡の年代         | 奈良時代と平安時代  |
| 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要 | 当該地は平城京右京七条一坊十五坪の西辺中央部にある。西一坊大路及び同東側溝を確認し、坪の内部では奈良時代の掘立柱建物六棟と井戸一基に加えて、 |

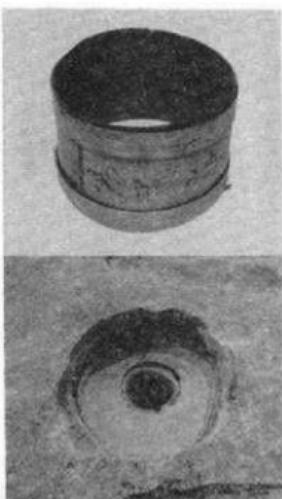
一世紀後半から一二世紀初頭にかけての井戸三基を検出した。このうち後者の井戸の一基に墨書き曲物が使用されていた。井戸の構造

は、円形掘形(径一・二m、深さ〇・九五m)の底部に墨書き曲物を据え、この上部に

- 須恵器甕の口縁部をのせ、その上にいまひとつの曲物を置いている。坪内出土の土器からみて、一二世紀末に廃絶したと推察できる。
- |            |                   |
|------------|-------------------|
| 8 木簡の积文・内容 | (1) 「湯屋□延久參年四月十日」 |
|------------|-------------------|

曲物は、厚さ六mmの薄板(檜材)を一巡させた本体(径四四・五mm、高さ三〇・五mm)の両端に環をはめ込んだもので、底板がはずされている。墨書きは、側板本体の外面中央部に施されている。

9 関係文献



墨書き曲物(上)と井戸全景(下)

# 木簡研究 第三号

卷頭言——中国簡牘呼称についての提言——

大庭 嶋

## 一九八〇年出土の木簡

平城宮・京跡 平城京左京(外京)五条五坊七坪 藤原宮

跡 神田遺跡 下之道 長岡京跡 大藏司遺跡 西沖遺跡

御殿・二之宮遺跡 野路岡田遺跡 多賀城跡 漆町西遺跡 櫻

町遺跡 白山橋遺跡 御館遺跡 御城跡 鳥・城山遺跡 草戸

千軒町遺跡 野田地区遺跡 観世音寺僧房跡 大宰府学校院跡 東

辺部

## 一九七七年以前出土の木簡(三)

平城宮跡(第二次・第三次次北) 薬師寺 下岡田遺跡

中國における簡牘研究の位相

庸米付札について

静岡県城山遺跡出土の具注層木簡について

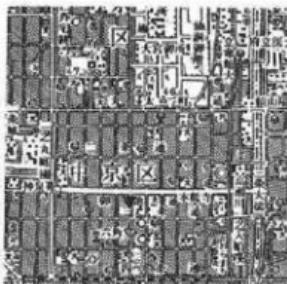
草戸千軒町遺跡出土の木簡—形態を中心にして—

志田原重人

叢報

価値 三五〇〇円 二四〇〇円

## 京都・平安京左京三条三坊十一町



(京都東北部)

この地の北側に後鳥羽上皇の院の御所である「押小路殿」、南には後白河法皇の院の御所の「三条西殿」が営まれ、十一町のこの地にも、譲岐守、佐渡守を歴任した高階為清が邸宅を構えていた可能性がある。

平安時代の遺構としては

調査地東端で「烏丸小路」の東側の倒溝と考えられる

- |                 |                               |
|-----------------|-------------------------------|
| 1 所在地           | 京都市中京区烏丸通筋小路上ル                |
| 2 調査期間          | 一九八〇年(昭55)一月～一九八一年一月          |
| 3 発掘機関          | 平安博物館                         |
| 4 調査担当者         | 寺島孝一                          |
| 5 遺跡の種類         | 都城跡                           |
| 6 遺跡の年代         | 平安時代～江戸時代                     |
| 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要 | 左京三条三坊十一町の東端中央部にある。平安時代の後期には、 |

この地の北側に後鳥羽上皇の院の御所である「押小路殿」、南には後白河法皇の院の御所の「三条西殿」が営まれ、十一町のこの地にも、譲岐守、佐渡守を歴任した高階為清

が邸宅を構えていた可能性

がある。

平安時代の遺構としては

調査地東端で「烏丸小路」

の東側の倒溝と考えられる

### 南北の溝、方形の木組のある井戸などを検出している。

他には、中世から近世に至る数多くの井戸や土塙を検出しているが、二つの土塙から二〇数個体の備前焼の大甕が出土した点が注目される。鎌倉時代後半から南北朝にかけてのものと考えられ、いずれも意識的に細かく破壊されて土塙に投棄されていた。

墨書のある下駄が出土したのは、共伴した土師皿などから一六世纪末から一七世纪前半と思われる木梓をもつた井戸である。土師皿の他に出土した遺物としては、美濃系天目茶碗、唐津系草文皿、羽釜などで、木製品としては他に箸などが出土している。

### 8 木簡の积文・内容

(1) 「一」

幅六・七cm、長さ約二〇cmの下駄の裏面に墨書されている。大きさからみて、女性用かと考えられる。

### 9 関係文献

『古代学協会『平安京跡研究調査報告第十二輯 押小路殿跡・平安京左京三条三坊十一町』(一九八四年)』

(寺島孝一)

## 大阪・穂積遺跡



(大阪西北部)

- 1 所在地 大阪府豊中市服部南町
  - 2 調査期間 一九八五年（昭60）七月／八月
  - 3 発掘機関 豊中市教育委員会
  - 4 調査担当者 田上雅則
  - 5 遺跡の種類 集落跡
  - 6 遺跡の年代 弥生時代後期～室町時代
  - 7 遺跡及び木筒出土遺構の概要
- 穂積遺跡は、猪名川、天竺川、神崎川などの大小河川によって形成された冲積平野に立地する、弥生時代後期から室町時代に亘る複合遺跡である。周辺には勝部遺跡、田能遺跡、庄内遺跡など学史的にも著名な遺跡が点在し、また、大阪府指定史跡の春日大社南部目代今西氏屋敷に所蔵される『今西家文書』より、摂関家領垂水西牧権廻郷に含まれる事が判明しており、考

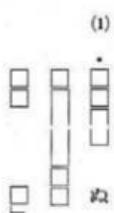
古学と文献とを対比する上でも、非常に注目されるところである。

当遺跡は、昭和初年に地元の住民によって発見され、戦前には弥生時代後期の土器を、この遺跡名に因んで「稚積式」と称し、畿内の後期弥生土器を指すものとして広く使用されたことから、学界でも著名な遺跡となつた。しかし発見以来本格的な調査もされず、遺跡の実体が不明のまま五〇年余りも経過した。

近年に至つて、数回の調査が実施され、弥生時代から古墳時代前期の良好な一括出土土器群や、桜井谷編年Ⅱ—2の須恵器を伴う径一八mの削平された円墳、縄文時代の壠立柱住居跡、井戸、条里制の坪境と考えられる溝を検出している。

一九八五年、マンション建設に伴う調査において、縄文時代の曲物を転用した井戸、掘立柱住居跡、溝を検出した。溝は東西に走行し、幅二m、深さ五〇cmを測り、堆積埋土より流水路と考えられるものである。木簡はこの溝より出土し、一四世紀初頭に比定される瓦器塊、土器器皿が共伴した。

#### 8 木簡の积文・内容



(1)

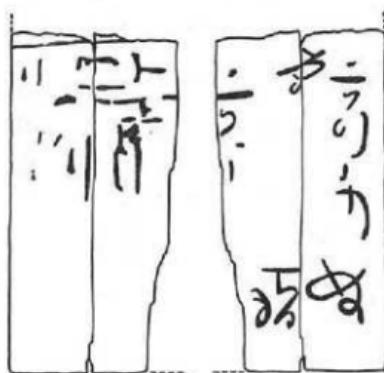


(横書)

(60)×(20)×2 0.81

上部、側面を欠損している。判読できる文字は「ぬ」だけであるが、左右の最初の字形が類似しているため、同じ文章が數行記されているものと推定される。尚、裏面にも墨の痕跡が認められるが、文字であるか否かは判断できない。

(田上雅則)

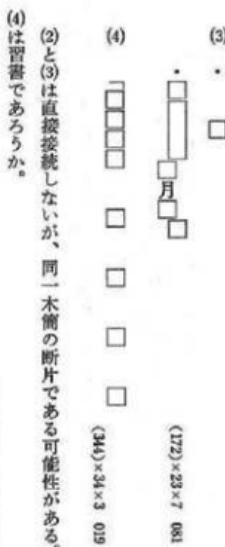


## 兵庫・辻井遺跡



(図 野)

- 1 所在地 兵庫県姫路市辻井字山之脇  
2 調査期間 一九八五年(昭60)四月二十九日  
3 発掘機関 姫路市教育委員会  
4 調査担当者 山本博利・秋枝芳  
5 遺跡の種類 水田跡  
6 遺跡の年代 弥生時代～平安時代  
7 遺跡及び木簡出土遺物の概要  
遺跡は白鳳時代創建の寺院跡として著名で、旧夢前川の形成した沖積平野に立地する。標高は約一九mである。姫路市教育委員会は昭和五七年から市道安室バイパス工事に伴い発掘調査を実施している。昭和五七年の調査で掘立柱建物跡、土壙、井戸、溝等が検出された。井戸内より多量の須恵器と共に木簡が三点出土した。今回の調査は前回査地の東約一五〇mに位置する。調査の結果、東端部より旧夢前川の跡と推定される河川跡が検出され、木製品等が多数出土した。
- 8 木簡の积文、内容
- (1) □内□□
- (2) □一斗止□
- (3) (128)×24×7 0.9



(山本博利・秋枝芳)

「大伴」「夫」の墨書き土器多数出土

——兵庫県教育委員会『丁・柳ヶ瀬遺跡発掘報告書』

一九八五年に兵庫県文化財調査報告書第三十冊として出版された。同書によると、七点の「大伴」、一点の「夫」、その他「捺垣」「殿」などの墨書き土器が出土している。「大伴」は平城宮、多賀城、姫路市辻井遺跡でみつかっているという。土器はいずれも奈良時代のもの。

本文編（本文二八頁・図版七二図）図版編（一〇七図）。

申込先 神戸市中央区下山手通四丁目十六番三号

兵庫県文化協会 頒価 一一〇〇〇円

## 兵庫・長尾沖田遺跡



所在地	兵庫県佐用郡佐用町佐用・長尾
調査期間	一九八五年(昭60)五月～八月
発掘機関	兵庫県教育委員会
調査担当者	大平 茂・村上賢治
遺跡の種類	集落跡・寺院関連遺跡
遺跡の年代	弥生時代中期～古墳時代前期、奈良時代後半～平安時代

### 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

遺跡の所在する佐用町は、播磨の西北端に位置し、歴史的・地理的に古来から交通の要衝（美作路・因幡路）である。

遺跡は、千種川支流の佐用川右岸、標高約一一〇mの台地上に立地している。

また同台地西には、白鳳時代の創建と考えられる長尾庵寺の塔心礎が残存する。

調査は、県土木道路改良

事業に伴う事前調査で、一九八三年に統く第二次全面調査である。

木筒と関連する遺構には、平安時代初頭の直線道路（見存長一七〇m、幅約三・五mでさらに北に延びるもの）とそれに付設された溝（幅約一・五m、深さ約三〇cm）がある。道路上面は、礫及び一部瓦片（長尾寺のもの）を敷き、低湿地部では丸太材を横にならべ、その上を河原石と土砂で被って構築している。

木筒は、低湿地部の道路西側溝から、多数の木製品・木片と共に出土した。その他出土遺物は、「川辺」「中殿」と記す墨書き器二点、斎事四点、木製勘定道具一点、馬具などがある。

## 8 木筒の跋文・内容

(1) 「奴□□□毎里



(2) □□天マ×

(280) × (45) × 3 019

(60) × (16) × 5 081

(1)・(2)ともわずかに墨痕が残るのみで、肉眼判読は不可能である。祝詞は、奈良国立文化財研究所鬼頭清明氏の御教示による。

## 9 関係文献

兵庫県教育委員会『長尾沖田遺跡現地説明会資料』（一九八五年）

同『ひょう』の遺跡 7号（一九八五年）

（大平茂）

## 愛知・朝日西遺跡



(名古屋北部)

- 1 所在地 愛知県西春日井郡清洲町
- 2 調査期間 一九八五年(昭60)五月~九月
- 3 発掘機関 勝愛知県埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 遠藤才文・佐藤公保・安藤義弘
- 5 遺跡の種類 城郭跡・都市跡
- 6 遺跡の年代 平安時代末期~江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

朝日西遺跡は、五条川の形成した自然堤防の東岸に位置する。当遺跡の南西約1kmには清洲城本丸跡がある。対岸の清洲城下町遺跡と共に、当遺跡は中世末から近世初頭には清洲城下の一大町を占め、外堀と中堀に囲まれた町人地と寺社地が展開する。

発掘調査は、一九八一年より名古屋環状二号線建設に伴う調査として継続して行われ、一九八五年度の調

査を以て終了した。

一九八五年度は本道部五ヵ所の調査が行われた。木筒及び墨書き曲物が出土したのは、東端の調査区のSDO-1とSDO-3である。

SDO-1は、一九八四年度の調査で慶長三・四年(一五九八・九)銘の卒塔婆と文禄二年(一五九三)銘の施釉陶器碗が出土したSDO-3に接続し、東西方向へ走り、東端はSDO-3の手前で終る。幅五メートル、深さ一~一二mを測る。木筒の出土した地点はSDO-1のSDO-3よりの端で、溝最下層の粘質土中より出土した。

SDO-3は南北方向へ走り、西側に幅二・五~二二mの大走りを有する。大走りを含めた幅は一七・五~二七m、深さは二・五mを

測る。「清洲村古城図」(蓬左文庫蔵)によると、同溝は外堀の位置と一致しており、また同溝の東側には同時代の遺構がないことから、外堀と考えられる。木筒と墨書きされた曲物は最下層の粘質土より出土した。

これらの溝は堆積状況及び共伴遺物より、一六世紀末から一七世紀初頭にかけて共存しており、SDO-1とSDO-3(外堀)に両された地区は、木筒以外に「南無阿弥陀仏」と墨書きされた卒塔婆がSDO-1より出土していること、町家に比べ区画面積が広いことから、城外を臨む寺社地と想定される。

- 8 木筒の状況・内容

SDO-1

(1) 「かちや町」

「六」十六間三尺六寸

是より北

SODIII

291×40×2 051

木簡の性格については検討の余地があるが、清洲城下町の町割に関する木簡として興味深いものである。(3)は一重巻きの曲物の側板外

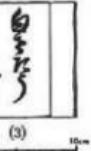
面に墨書きされており、底板は欠く。

なお、木簡の篆文に関しては、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部加藤優氏の御指導を得た。記して感謝したい。

## 9 関係文献

勝愛知県埋蔵文化財センター『年報 昭和六〇年度』(一九八六年)

(佐藤公保)



(3) 1cm

- (2) □□小□所 [牧々]  
 □□□□□□□□小□所 [牧々]  
 (3) 白さたう  
 売行 高さ98 幅元幅100 厚さ1.5 061



(1)



(2)

(1)(2)の木簡にある「かちや町」「小牧」町は、共に文禄二・三年(一五九三・四)に実施された「清須 町家改」(『駒井日記』)の日比野下野諸取分の一の町の中に見られる。このことから、「かちや町」「小牧」町を含めた一二の町は、本丸から北東方向にあたる朝日西遺跡周辺に位置していたと考えられる。(1)の「十六間三尺六寸」は「かちや町」の奥行きを示すものと推定され、町割の計画性がうかがえる。これらのことから、朝日西遺跡の西側を通過していした小牧街道沿いやその周辺には、「かちや町」「小牧」町等の一二の町が一定の区画を有し展開していたと考えられる。なお、(1)(2)の



（豊）田

発掘調査は、史跡公園整

## 愛知・沓掛城跡

愛知県豊明市沓掛町字東本郷

所在地

愛知県豊明市沓掛町字東本郷

調査期間

一九八一年（昭56）一二月～一九八四年一二月

発掘機関

豊明市沓掛城址発掘調査団

調査担当者

伊藤秋男・松原隆治・木村光一

遺跡の種類

城跡跡

遺跡の年代

一五世紀末～一六世紀

遺跡及び木簡出土造構の概要

本遺跡は、名古屋市南東部から隣接する豊明市にかけて、北西から南東にのびる低丘陵の先端に立地する城跡である。標高は二一m前後で、平城とと考えられる。

また、本城跡は、永禄三年（一五六〇）の桶狭間の戦前の

夜に、今川義元が宿營した  
という伝承が残されている  
ことでも著名である。桶狭

間古戦場跡は、西南西四km  
のところに位置する。

(1) ■□□□

の

□

・「と

〔(86) □〕

(3) (2)  
・「 天文

〔(86) □〕

十七」  
・「〔(86) (花押)〕

(4) •「 天文

〔(86) □〕

十七」  
・「〔(86) (花押)〕

108×(15)×2.5  
51×35×4.5

## 十七

・「(5)。(花押)」

伊藤秋男・木村光一「愛知啓掛城跡」『木簡研究』7号  
一九八五年  
豊明市教育委員会『音掛城址』(一九八六年・印刷中)

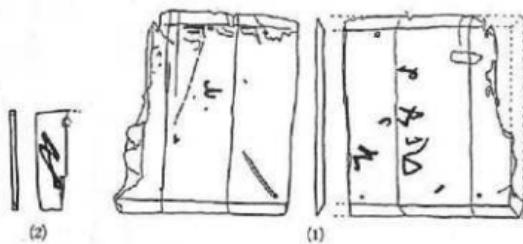
(木村光一)

本城跡出土の墨書の認められる木簡は、ほかに二八点、計三三点にのぼる。ほかの二八点は、昨年の本誌上において、その概要は発表済であり、今回の五点は、遺物再整理の段階で新たに発見されたものと、諸般の事情で、前回發表できなかつたものである。

(1)については、文字として認められる部分もあるが、文字の方向も一定せず、一貫した意味をなさない。落書の類と考えられる。(2)についても、墨痕はあるが文字ではないとも考えられる。(3)・(5)は、前回發表した(7)・(8)『木簡研究』7号)と同様の形態・墨書をもつもので天文一七年(一五四八年)を表わすと考えられる。

なお、(4)・(5)の木簡の法量が未記入であるのは、実測前に、保存処理に出してしまった当方の不手際の結果であり、もし機会があれば、後日何らかの形で發表したい。

また、昨年の本誌上では触れなかつたが、木簡の釈文・解説については、愛知教育大学教授新行紀一氏に、そのための赤外線テレビ撮影については、浜松市立博物館の向坂綱一・塗畠敏の両氏に、様々な点でお世話になった。ここに、あらためて感謝の意を記させていただきます。



## 静岡・神明原・元宮川遺跡



(静岡)

本遺跡は、静岡平野の南東部を流れる大谷川流域に所在する。安部川扇状地の末端と、東側の有度山丘陵とに挟まれた低湿地を流れる大谷川の両岸にひろがる南北約1km、東西約500mと静岡市内最大の遺跡である。

本調査は大谷川放水路建設工事に伴ない、大谷川の川幅の拡幅のため両岸を幅

- |               |   |
|---------------|---|
| 所在地           | 静岡市大谷（高松・水上・西大谷・宮川）                     |
| 調査期間          | 一九八五年（昭60）四月～一九八六年三月                    |
| 発掘機関          | 財静岡県埋蔵文化財調査研究所                          |
| 調査担当者         | 栗野克己・成島仁・小島日出一・森下春美・尾立順司・矢田勝・鈴木基之・寺田甲子郎 |
| 遺跡の種類         | 祭祀遺跡・集落跡・河川跡                            |
| 遺跡の年代         | 縄文時代～近世                                 |
| 遺跡及び木簡出土遺構の概要 |   |



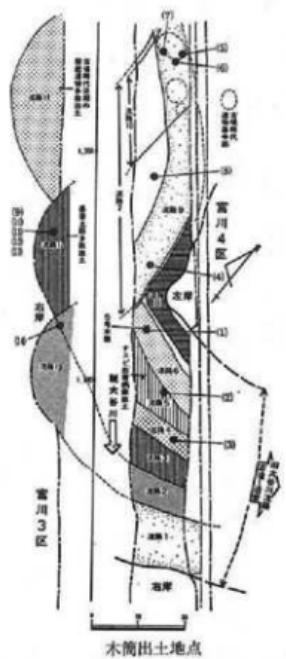
遺跡の範囲と旧大谷川河道推定図

約200m広げるためのものである。遺跡の中央部を南北1kmにわたり貫通するため、昭和五五年度から発掘調査を開始、昭和六〇年度は遺跡のほぼ北半部を調査した。調査の結果、旧大谷川の河道が検出され、その埋積土内から、古墳時代後期・奈良・平安時代・中世にかけてのおびただしい量の祭祀遺物が出土、古代～中世における大規模な「水辺のまつり」がおこなわれていたことがうかがわれる。また、旧大谷川の両岸にひろがる微高地には、弥生時代・奈良・平安時代・中・近世にかけての堅穴住居跡・掘立柱建物・井戸・溝

・土壌・柵列・粘土探掘跡などの遺構が検出された。

昭和五八・五九年度に四点の木簡が発見されており、すでに報告した。昭和六〇年度は、一五点の木簡が旧大谷川河道の堆積土層内から出土した。旧大谷川河道は、ほぼ古墳時代後期から形成されたもので、現代まで継続しているが、蛇行・漫食による変遷がみられ、①古墳時代後期、②奈良・平安時代、③平安時代末～中世、④近世～近代、⑤現在の流路に大別できる。新しい時期の流路が古い時期の流路を侵食破壊し、古い時期の遺物を混入している部分が多いが、年代幅を特定できる流路が良好に現存している部分もある。

### 一 宮川3・4区 旧大谷川河道



流路 1	近世～現代
流路 2	鎌倉～室町時代
流路 3	平安末～鎌倉時代
流路 4	平安時代
流路 5	古墳時代終末～奈良時代
流路 6	古墳時代後期
流路 7	平安時代末～中世
流路 8	古墳時代後期
流路 9	近世～現代
流路 10	古墳時代後期
流路 11	古墳時代後期
流路 12	平安末～鎌倉時代
流路 13	中世

宮川3・4区の旧大谷川流路の年代観

三本の流路を検出した。流路の年代觀は、ほぼ七期に区分できる。木簡は、これらの流路から一四点が出土した。(1)は流路6の最下層から出土したもので、古墳時代後期の須恵器・土師器などの祭祀遺物のほか、杵・編籠・横櫛などの木製品や、耳環・石製防錐車、砥石なども出土している。須恵器の环をA群～E群の五群に分類した。これらは静岡県の須恵器の編年鏡から、ほぼ六世紀中葉から七世紀中葉に比定されている。环蓋、罐、長頸甕、高环、平瓶も同時期に比定できるが、罐のうち一点はやや古い様相のものが存在する。そこで(1)木簡の年代觀については、伴出須恵器群のうち最も新しいE群の時期が参考となる。さらに、木簡の性格から七世紀第3四半

期となる可能性が強い。類例として、浜松市伊場遺跡1号、二号木簡に伴出した須恵器があり、この流路6とほぼ同じ年代のものであるという。

(2)木簡は奈良時代（七世紀末から八世紀前半）と考えられる流路5から出土。ナスビ形着柄鉢の完形品、玉類、墨書き土器「多麻呂」、人形、馬形、畜串、堅篠なども共伴した。(3)木簡は平安時代（一〇世紀後半）と考えられる流路4から出土。緑釉陶器、灰釉陶器、墨書き土器「中万」「水」などが共伴した。

平安時代末から中世の流路7からは、(4)～(8)が散在して出土した。緑釉陶器、灰釉陶器、横櫛、畜串などのほか、万年通宝・長年大宝なども出土した。

平安時代末から鎌倉時代の流路12からは、(9)～(13)の五点が墨書き土器四点や、墨釉陶器、横櫛、ミニチュアの堅杵・供膳、糸巻、畜串、青磁、白磁などとともに出土、一括祭祀遺物と考えられる。

中世の流路13から、(14)と墨書き土器四点が出土した。

## 二 宮川6区 旧大谷川河道

ここでは、宮川3・4区のような整然とした流路は検出されていない。平安時代末から鎌倉時代の包含層より、(15)の文字の書かれた縄馬が出土した。

## 8 木簡の証文・内容 一 宮川3・4区

旧大谷川 流路6

(1) 「□□」  
・「相星五十戸」

135×22×3.5 011 五号

旧大谷川 流路5

(2) 「△□」

旧大谷川 流路4

(3) 「△□」

旧大谷川 流路7

(4) 「△ 南□□□□」

201×30×2.5 051 六号

(5) □

(178)×12×6 059 七号

(6) □永二年

091 八号

(7) □□

(148)×29×5 061 九号

(8) □□

255×23×2 061 十号

旧大谷川 流路12

(9) 仁王 □□

(120)×23×4 061 十一号

(4) 「南天□□□□

(184)×18×661 十二号

〔妙<sup>キ</sup>〕  
「南□□」  
×

(59)×27×12 661 十三号  
(79)×19×5.5 661 十四号

(5) 「南×

(135)×28×5 661 十六号

(1) 「南□大日×

(135)×28×5 661 十六号

旧大谷川 流路13

(4) 「き 南無大日□□」

227×22×3.5 651 十七号

(1) 「相星」は、『和名類聚抄』駿河國有度郡の項に記載されてい

る鶴名のうち「會星」(アホシ)に該当するものと考えられる。五

十戸の五の字は一部不明瞭である。戸の字は右に一画余分な点がある。

裏の一文字のうち、一文字目の偏を馬と解することができる。

旁は不鮮明であるが、上に口のような墨痕がうかがえる、脚の可能性もあるが定かではない。二文字目は、長と読むのか表と読むのか判然としない。

(4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12) (13) (14)

8 関係文献

静岡県埋蔵文化財調査研究所『静岡県神明原・元宮川遺跡木簡概要』(一九八五年)

同『静岡県神明原・元宮川遺跡 大谷川放水路建設に伴う発掘調査報告』(一九八六年)

(著者名)

年号の書かれた木筒(6)は、削削であるうえ、上下とも切断されている。同一土層からの伴出遺物に、一三世紀頃の瓷器系小皿がある。

二 宮川6区

旧大谷川 流路6

〔引<sup>カ</sup>くへ人能心を  
〔个<sup>キ</sup>〕  
〔かよて〕  
〔引<sup>カ</sup>くへ人能心を  
〔个<sup>キ</sup>〕  
〔かよて〕  
〔引<sup>カ</sup>くへ人能心を  
〔个<sup>キ</sup>〕  
〔かよて〕  
〕

・「のへ見てハ  
〔引<sup>カ</sup>くへ人能心を  
〔个<sup>キ</sup>〕  
〔かよて〕  
〕

〔引<sup>カ</sup>くへ人能心を  
〔个<sup>キ</sup>〕  
〔かよて〕  
〕

107×(45.5)×4 661 十八号

(8号)

鉢馬であり、一面に馬を引く人物が描かれている。馬の尾の右側にひらがなが三文字書かれているが、三文字目は板が切断されているため欠損している。裏面には長軸方向に三行の文字がみられる。一行目に「このへ見てハ」とあることから、表の絵と関連が深い願文が記されていると考えられるが、文意は判然としない。

浮きでいるので、卒塔婆として雨ざらしのうえ折損したと考えられるものである。(4)(5)(6)(7)(8)(9)(10)は頭部を主頭にととのえ、最上部に梵字が一文字書かれているものもある。(4)(6)。これらの木簡の中には「南」の字から始まるものが多い。



(横浜市立)鎌倉高校

- 1 所在地 神奈川県鎌倉市御成町  
2 調査期間 一九八四年(昭59)五月~二月、一九八五年一月  
3 発掘機関 今小路周辺遺跡発掘調査団  
4 調査担当者 吉田章一郎・河野真知郎  
5 遺跡の種類 官衙跡・中世都市街地跡  
6 遺跡の年代 奈良時代~鎌倉時代  
7 遺跡及び木簡出土遺跡の概要  
今小路周辺遺跡とは、中世都市鎌倉の中央路若宮大路の西に平行する今小路(今大路)の周辺を指すが、調査地は同路の西側にある御成小学校の校庭部分である。調査地は標高八~九mで、西側に山を負い東方に傾斜する山麓低地に存在する。遺跡の標高は、中世で六~七m、古代では五m前後である。

## 神奈川・今小路周辺遺跡 (御成小学校内)

ある。調査地の南五〇〇mの所に旧東海道が走っていたと考えられる古砂丘帯があり、北三〇〇mの所には古代寺院跡の存在を想わせる古瓦敷布地がある。

木簡が出土したのは古代官衙跡の柱穴覆土からと、中世井戸の覆土からである。古代官衙跡は二期にわたる建物跡で、第一期は東に開くコ字形配置の獨立柱建物群(西に正殿、南北に脇殿、東に櫓)から成り、第二期は北側に四面廂の大型獨立柱建物、西に總柱建物二棟と長い建物、南に總柱建物(あるいは門か)と長い建物二棟を配する特異な配置から成る。

(1)木簡は、第一期の正殿と南脇殿とを結ぶような南西角地に並ぶ一本柱列のうちの一柱穴より出土した。柱穴は柱が抜取られたらしい埋没状況で、木簡は柱根削片と共に旧柱穴内に廃棄されたものと考えられる。(2)木簡は、官衙建物群より北方にはずれる場所の所属不明の柱穴より出土した。この柱穴より柱は抜取られたよう、木簡は木の葉の小残片を含む埋土中にあった。

中世の木簡(3)(4)は、中世武家屋敷の南外方にある庶民居住区(仮称)の井戸より出土した。この井戸は縦板方形横桟型の井戸枠をもち、掘り込み面からすると一四世紀初頭と前半のものと考えられるが、出土遺物が少く、時期決定が難しい。

## 8 木簡の収文・内容

(1) .「輔五斗天平五年七月十四日

.「郷長丸子」□

(266) × 30 × 6 639



691

(2) 「三田」□二月×

(102) × (21.5) × 0.5 651



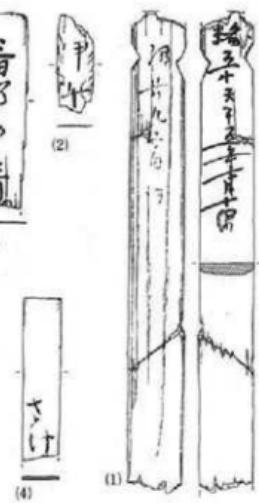
(91) × (20.5) × 1 651

(1)(2)については、国立歴史民俗博物館の平川南氏に辨読していた  
だいた。(3)(4)は、折敷板の断片に文字の書かれたもので、類例は市  
内でも鶴岡八幡宮境内など何ヵ所かで出土している。

## 9 関係文献

鎌倉市今小路周辺遺跡(御成小学校内)発掘調査団『IN—III通信  
5』(一九八五年)

(河野真知郎)



## 神奈川・鶴岡八幡宮境内

### 研修道場用地遺跡



(横須賀)

鶴岡八幡宮は康平六年（一〇六三）、源頼義が鎌倉由比郷に、前九年の役の戦勝を記念し勅請した石清水八幡宮が前身であり、治承四年（一一八〇）鎌倉に入った源頼朝が現在地、小林郷北山に遷した。  
もとは神仏習合により、鶴岡八幡宮寺と称し別当職等も置かれていたが、明治

- |       |                        |
|-------|------------------------|
| 所在地   | 神奈川県鎌倉市雪ノ下             |
| 調査期間  | 一九八一年（昭56）八月～一九八二年九月   |
| 発掘機関  | 鶴岡八幡宮境内発掘調査団（团长・大三輪謙泰） |
| 発掘担当者 | 齊木秀雄                   |
| 遺跡の種類 | 寺院跡                    |
| 遺跡の年代 | 一二世紀末～一六世紀             |

元年（八六八）の神仏分離令を受け境内の大塔以下の諸堂と共に仏跡も廃止された。

調査地点は鶴岡八幡宮境内の東側境界線（土塁）内側、馬場道北一帯に位置し、豊臣秀吉の指示により天正十九年（一五九一）に作成された謂ゆる「造営目論見絵図」では「やなぎ原」と記されている辺である。

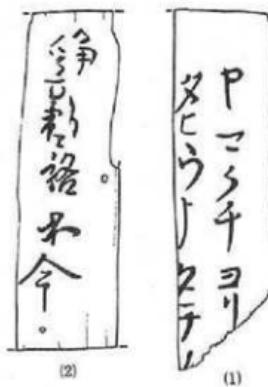
調査では一二世紀末～五世紀にかけて四期にわたり構築された版築地堀面が確認され、それらの版築面から據立柱建物、半地下式建物（方形堅穴建豪餘）、井戸、溝、土壠、土塁等が検出され、多量の中国産陶磁器、酒戸、漆製品、常滑窯製品、かわらけ、仏頭あるいは仏像に伴う莊嚴具を含む漆製品、人形、僧形八幡神坐像、将棋駒等を含む木製品が出土している。木簡、墨書陶磁器、木片等が出土したのは検出された土塁に伴う内側（境内側）の溝のうち第三期の溝、第四期の溝である。それぞれの溝の年代は第二期が一四世紀中葉～一五世紀中葉、第三期が一三世紀中葉～一四世紀初頭と考えられる。墨書陶磁器類で判読できるものは「仏」「上」、漆器皿は「刀」である。

## 8 木簡の収文・内容

(1) 「ヤマクチヨリ

タヒウ□タテノ

(198)×(42)×1 081



9 関係文献  
鎌倉市鶴岡八幡宮境内遺跡発掘調査団『鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書』（一九八三年）  
(齊木秀雄)

この他に「梵字（キリーカ）南無阿弥陀仏」と書かれた板碑伝（最大288×25×2）四点、墨書木片二六点、札状木製品一〇点が出土している。

(2) 「□□○□○□○□○」  
・「上下内外内宮」  
〔三枚〕  
132×(6)×1 081  
(3) 「□□○□○□○□○」  
・「□□○□○□○」  
〔三枚〕  
151×(43)×1 081

## 茨城・鹿島湖岸北部条里遺跡

(豊郷条里沼尾地区)



(鉢田・潮来)

田下約一m程の所で中里川  
田口 勝

### 所在地

茨城県鹿島郡鹿島町大字沼尾字沼尾

### 調査期間

一九八四年(昭59)四月~九月

### 発掘機関

鹿島町教育委員会

### 調査担当者

田口 勝

### 遺跡の種類

条里遺跡(水田跡・田河川)

### 遺跡の年代

縄文時代早期と江戸時代

### 遺跡及び木簡出土遺構の概要

鹿島湖岸北部条里遺跡は茨城県の南東部、北浦の東岸に位置しており、北浦湖岸の北部条里は宮中条里(爪木地区)と豊郷条里(須賀・沼尾地区)からなってい

る。須賀地区は古墳時代後期の水路や網代、杭列、水田跡、奈良時代の水路(運河)や田舟等の木製品が多く検出されている。沼尾地区はI区(北側)、II区(南側)に分けられて、I区では現水

### 8 木簡の积文・内容

松の木等の先端を杭の様に尖らせ、削り取った一面に供養経を書いたもの(当地で俗にいうザカマタ。難産で死んだ犬の供養をした等)である。墨の残りが悪く文字が明確ではないが、河川が洗い流してきしたものか、あるいは人が流したものかが沈没したものであろう。

(田口 勝)

の旧河川流路と思われる遺構が検出され、多くの木製品や土器、骨貝、土製品、石製品、鉄製品等が出土している。また、II区では規模が約5m×8mの短冊形の水田(時期不詳)が検出されている。

I区で検出された墨書のある木製品は旧流路の済まりの部分で四点出土したもので、建築材の一部と思われる組み木、下駄、簾、櫛等日常生活用具と考えられるものや、木筒状の薄い板状製品(三宝荒舟か)を伴出した。遺物は新旧混在しているが、中世以降のものが多くみられる。



（近江八幡）  
北上  
西河原  
主町  
中主町  
北条  
吉原  
六条  
主  
中主  
西河原  
木簡  
（近江八幡）  
して三時期の遺構が検出で

## 滋賀・西河原森ノ内遺跡

にしがわらもりうち

- |               |                 |
|---------------|-----------------|
| 所在地           | 滋賀県野洲郡中主町大字西河原  |
| 調査期間          | 一九八五年（昭60）四月～一月 |
| 発掘機関          | 中主町教育委員会        |
| 調査担当者         | 徳納克己・山田謙吾       |
| 遺跡の種類         | 集落跡             |
| 遺跡の年代         | 弥生時代前期～室町時代     |
| 遺跡及び木簡出土遺構の概要 |                 |

西河原森ノ内遺跡は、琵琶湖東岸の湖南平野北部の、鈴鹿山系に源を発する野洲川と日野川に挟まれた冲積低地に立地する遺跡で、

湖岸より内陸へ約3kmほど入った標高八七m前後の緩傾斜地の微丘陵に位置する。

遺跡は、弥生時代前期より室町時代に至る複合遺跡

で、遺跡北部の木簡出土土地点では、平安時代前期、奈良時代、白鳳時代末の大別

きた。

調査は、中主町の土地区画整理事業にともない一九八四年より着手し、現在までに縦面積一四、二〇〇畝を調査している。遺跡の範囲は、調査地が道路用地のため明確にできないが、南北五〇〇m、東西三〇〇m余りと考えられ、今回検出された白鳳時代末から奈良時代前期の掘立柱建物群の範囲は、南北六三m以上、東西四八m以上の広がりをもつと思われる。これらの建物跡は、その配置や構造・出土遺物などから在地の有力者の居宅と考えられる。

木簡は、四点発見されている。(1)の出土したSD二二〇一は、幅約四m、深さ約〇・七mを測り、遺跡の東端を限る溝と思われる。木簡の共伴遺物は、八世紀前半の土器の他、刀子、鎌、柳箱、堅杵、杓子、盤、鉢、曲物と墨痕のない付札、祭祀具の斎串、舟形、棒状木製品等がある。(2)の出土したSD二二〇五は、幅二m、深さ〇・六mで、この溝が廃絶された後にSB二二〇二が建てられたと考えられる。木簡の共伴遺物は、七世紀後半の土器、フイゴの羽口と木製品（小机、下駄、曲物）がある。(3)は、幅約二m、深さ約〇・五mのSD二二〇八より出土した。(4)は、SD二二〇一の西側、下層遺構上面の包含層より出土した。その他、包含層からの出土遺物には、八世紀代の土器と共に石帝（丸網）、円面鏡、桃の果核と木製品（斧柱、矛、櫛、馬鞍、下駄）がある。墨書土器には「大」「神」「神主家」「凡記」「鬼」等の文字を書いた土器が包含層とSD二二〇一よ

り出土している。

## 8 木簡の积文・内容

(1)

「戸主石辺君玉足」  
戸主三宅連唯麻呂  
戸主登美史東人  
戸主馬道首少廣  
戸主大友行  
戸主佐多  
戸主石木主寸  
戸主郡主寸得足  
戸主(三子)  
戸主  
馬道  
馬道臣麻呂

(2)

「掠□之我□持往□馬不□福者□□□得故我者反來之故是汝卜部」

「自舟人率而可行也 其福在𠙴者衣知評平留五十戸且波博士家」

(3)

馬廿六一布々  
羽止巳乃六二布々  
小女兒六二布六六々

八  
六条八里十三

(4)

530×54×8 011

410×35×2 011 \*

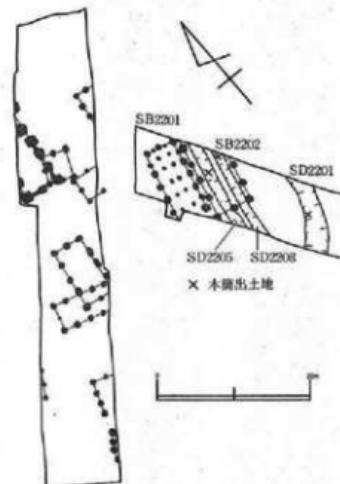
(66)×70×6 019

(155)×19×6.5 039

(1) は短冊形の四隅を切り落とした形状を呈し、表裏に野洲郡内と考えられる戸主名を遺記している。「石辺君玉尾」は、平城宮南面東門（玉牛門）近くの一一条大路北側溝 SD-1-250より出土した木簡「益珠郡馬道郷石辺玉尾」（平城宮発掘調査出土木簡報（十四）「木簡研究」第三号）と同一人物と思われる。また「馬道□□□」については、「馬道」の地名を氏名としている者がいるなど『和名抄』にない馬道郷の存在が明確になったといえる。年代は、平城宮出土の木簡に「撫」とあることから七一五年の郷里制施行以後で、溝の共伴遺物より八世纪前半のものと考えられる。

(2) は、薄く、表面を丁寧に調整し、表裏に墨書きしている。内容は、我が「ト部」に宛てた指示文書の形式になつており、漢文の中に一部和文を混えた和文体で書かれている。我は、自分の稱は馬が手に入らなかつたので、「ト部」に舟人を率いて稻を取りに行くよう指示している。行き先の「衣知評平留五十戸」は、現在の彦根市南西部に位置し、中主町の森ノ内遺跡より北東へ直線距離にして約二〇kmのところにある。「旦波博士」は、ここに居住する五十戸長と考えられる。

(3) は、上端が欠損しており、下端を尖らせている。表裏に墨書きしているが、裏面には署名と思われるものがある。表面には、物品名と数量が書かれており、中段の「小」「兒」は男子の年齢による区分であるが、ここでは「女」も含めて数量が示されている。年代は、



木簡出土地点図

層位から判断して(2)と同時期のものと推定できる。

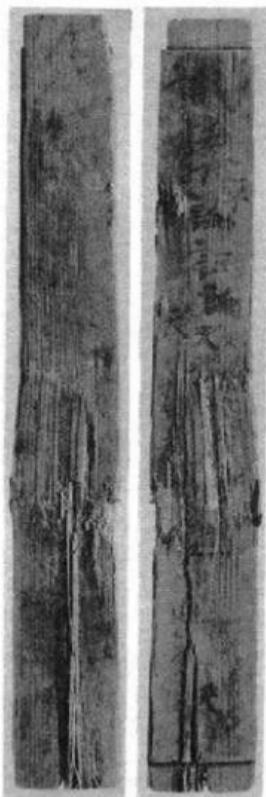
(4) は、上部が両側からの切れ込みをもち先をとがらせたもので、下端を尖いている。本来は、大型の木簡であったであろうが、加工、転用したものである。訛文どおりの条里呼称とすると、本調査地内の推定条里と一致する。

尚、木簡の訛文・解説には、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部史料調査室の方々に御教示を得た。記して謝意を表します。  
（後藤克己）・山田誠吾

## 滋賀・勸学院遺跡



(近江八幡)

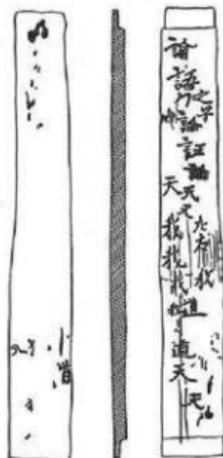


- 1 所在地 滋賀県近江八幡市馬瀬町
- 2 調査期間 一九八五年(昭60)一〇月~一二月
- 3 発掘機関 滋賀県文化財保護協会
- 4 調査担当者 仲川 靖
- 5 遺跡の種類 集落跡及び官衙跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代後期、奈良時代中期、平安時代後期~鎌倉時代初頭

約九七mの水田地帯にある。一九八五年に県営は場整備事業が計画され、事前発掘調査を実施した。この付近は以前より、「西殿」「大」と記された奈良時代の墨書き土器が出土しており、湖生郡衙の推定地とされていた。調査の結果、奈良時代中期の一間×三間の総柱の掘立柱建物二棟、井戸一基、溝一条を検出した。木簡は、そのうちの井戸より出土した。井戸は四隅横枝止め縦板井戸と称されるもので、鎮めの祭をして埋戻しており、斎串・柳箱・橋の種子・瓜・網籠・土器片が出土している。

8 木簡の状況・内容

(1) 「之子 左右 我 □□□」  
論語□論□論天 天道 □□□  
天 我我我 □道天 □□□



（仲川  
道）

習書木筒で、二人の人物が書き記したとみられる。『論語』という書籍名と漢籍の一文にあるかと思える文字を手習いしたとみられる。『論語』は、養老学令5種周易尚書条によると、奈良時代では大学寮での必修書で、官吏登用試験にも用いられており、この習書木筒も、『論語』という文字を手習いしていた下級役人の姿をほうふつさせる。又、蒲生郡衙の存在を示唆する資料とも言えよう。

『入』 331×48×10 95



## 木簡研究 第四号

卷頭言——木簡保存法の思い出——

坪井清足

一九八一年出土の木簡

坪井清足

摘要 平城宮跡 奈良女子大學構内遺跡 法隆寺 藤原宮跡 長岡京跡 三条西殿跡 烏羽離宮跡 若江遺跡 佐堂遺跡 大阪城 三の丸（大手口）遺跡 小曾根遺跡 尾張國府跡 下津城跡 板尻遺跡 小川城跡 恒川遺跡 三ヶ寺Ⅰ遺跡 下野國府跡 多賀城跡 郡山遺跡 胆沢城跡 道伝遺跡 笹原遺跡 明成寺道路 安田遺跡 大森城跡 高當遺跡 漆町遺跡（C地区） 南吉 田暮山遺跡 百間川遺跡群（原尾島道路） 草戸千軒町遺跡 道照遺跡 長門國分寺跡 野田地区遺跡 湯川神社境内遺跡 大宰府跡（大袖地区） 九州大学（筑紫地区）構内遺跡 長野遺跡 辻田西遺跡

一九七七年以前出土の木簡（四）

平城宮跡（第二二次南・第二七次・第二八次・第二九次）

和田 萍

呪符木簡の系譜  
木簡と上代文学——水經物付札をめぐって——

小谷博泰

「漆紙文書」出土概要

佐藤宗諱

頃価 三五〇〇円 二四〇〇円

## 滋賀・柿堂遺跡

の溝跡・掘立柱建物跡のほか、弥生時代後期の自然河道・方形周溝墓、奈良時代末期～平安時代前期の自然河道である。木簡は、この河道より二点出土した。

## 所在地

滋賀県神崎郡能登川町大字今字柿堂

## 調査期間

一九八四年（昭59）四月～一九八六年八月

## 発掘機関

能登川町教育委員会

## 調査担当者

山本一博

## 遺跡の種類

集落跡

## 遺跡の年代

弥生時代後期、奈良時代末期～鎌倉時代

## 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

柿堂遺跡は彦根市との境界である愛知川と、通称朝鮮人街道と呼ばれる県道の交差点西側に位置する。付近にはいわゆる神崎郡条里

が広い範囲にわたって遺存

しており、標高は約九〇m

を測る。一九八四年より工

場の拡張工事に伴う事前発

掘調査を、能登川町教育委

員会が実施しており、一九

八六年で終了の予定である。



(彦根西部)

主な検出遺構は、条里方向

にのつとった平安時代後期

- 8 木簡の假文・内容
- (1) □□錦織主寸□<
- 小白在 <

135×25×3 823

まず文字は表裏両面に認められる。そして木簡の形態と文字の關係であるが、この两者はセットではないと考えられる。長方形の材の一端を尖らせ、他端の側面の一方に切り込みをいたしたこの形態は完形品と判断される。このため、偏を欠く「錦織」の文字は、この木簡が本来もう少し巾の広いものであったことを想像させる。また「小白在」はほぼ中央に位置するものの、「錦織」などと同一の手によるものと思われる。さて「錦織」であるが、錦織主寸□といふ人名の可能性もあり、「日本書紀」天智天皇四年一月条の「以三百百百姓男女四百余人居于近江國神前郡」との関連が考えられるほか、付近に鎮座する西郡神社と音が共通することも興味深い。

(山本一博)

## 岩手・胆沢城跡



(上) 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要  
胆沢城跡は、築地および内外の溝により方約六七五mに外郭が画され、南北中軸線上の南から三分の一に、柱列によって方約八九mに区画される政庁域が位置している。政庁域の発掘調査は、これまでに、正殿、南辺区画東半および東辺区画で実施され、三期変遷の区画施設と六期変遷の正殿が判明している。第四九次調査は、この政庁北辺区画施設中央部の構造を解明す

- 1 所在地 岩手県水沢市佐倉川
- 2 調査期間 一九八五年(昭60)五月十九日
- 3 発掘機関 水沢市教育委員会
- 4 調査担当者 伊藤博幸・佐久間賢・土沼章一
- 5 遺跡の種類 古代城柵跡
- 6 遺跡の年代 九世紀初頭～一〇世紀前半
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

胆沢城跡は、築地および内外の溝により方約六七五mに外郭が画され、南北中軸線上の南から三分の一に、柱列によって方約八九mに区画される政庁域が位置している。政庁域の発掘調査は、これまでに、正殿、

南辺区画東半および東辺区画で実施され、三期変遷の区画施設と六期変遷の正殿が判明している。第四九次調査は、この政庁北辺区画施設中央部の構造を解明す

- (1) 行之古垣一荷 右木



258×139×6 065

下端に逆V字状の切り込みが見られ、二次的転用の可能性をもつ。裏面は縦方向に板面がはしけ、文字の判読が出来ない。なお、积文

る目的で実施した。調査の結果、北辺区画の柱列とほぼ棟通りを一致させる梁行二間の六期に変遷する東西棟が検出された。第一期の建物は桁行一三間で南中央が開口する。第三期以降は東西の非対称建物によって構成され、西棟には南廻が付く。また、第五・六期には、東西棟間に櫓門的施設が付加される。また、北辺区画柱列の外側には幅二・一・三・五m、深さ〇・五m・九mの溝が位置する。

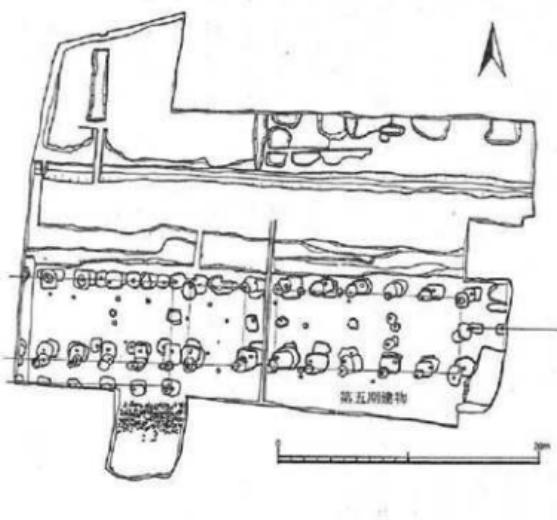
木簡は、上記建物北側の溝から出土した。この地区の溝では二度の改修がみられ、土留め杭により南岸を補修した二期目の溝底から木簡が発見され、其伴遺物および層位関係から、九世紀中葉前後に投棄されたと解される。なお、政庁城北東には、官衙地区(北方官衙)の存在が確認されており、その南を限ると解される東西方向の柱列および溝跡が政庁区画北辺と約一三mの間隔をおいて位置している。

- 8 木簡の积文・内容



は平川南氏の解説に依った。

9 関係文献  
水沢市教育委員会『昭和六〇年度胆沢城跡発掘調査概報』(一九八六年)  
(佐久間賢)



## 青森・浪岡城跡

なみ おおか

### 所在地

青森県南津軽郡浪岡町

### 調査期間

一九八四年（昭59）四月  
北館と西館間の堀跡 一九八五年

六月～七月  
北館北側の堀跡

### 発掘機関

浪岡町教育委員会

### 調査担当者

工藤清泰・木村浩一

### 遺跡の種類

中世城館跡

### 遺跡の年代

一五世紀後半～一六世紀末

### 遺跡及び木簡出土遺構の概要



（青森西部）

浪岡城跡は、青森市と弘前市のほぼ中間、津軽平野の東側に位置し、浪岡町市街地より約1km東の低丘陵の末端を切り崩し、自然の河川と人工的な導水による掘により八つの郭に区画されている。堀は中土壁を持ち二重・三重の形態を見せ

## 8 木簡の积文・内容



(1)

「梵字」



(2)

×号一經其×

438×58×2.5 651  
(360)×(170)×16 651



(3)

(1)は、光明真言全文が中左右中…と配されたもので、文字部分が浮き出た状態で残っている。形態と合わせると、祐経と考えられる。かなり大形のものである。

(2)の文字は墨が残っておらず、墨痕がわずかに盛り上がる形で残っていた。卒塔婆・板碑・磐・看板等の機能が考えられるが、破損品であり、内容も不明のため定かではない。

## 9 関係文献

浪岡町教育委員会『浪岡城跡Ⅳ』(一九八六年)

同『浪岡城跡－主要地方道青森浪岡線特殊改良一種工事に伴う発掘調査－』(一九八六年)

(木村浩一)

一方、主要地方道青森浪岡線の改良工事に伴って行われた北館の北側にあたる掘部分二三七mの緊急調査では、シガラミ状遺構・二本の堀跡と性格不明な遺構二ヵ所が検出され、そのうち、性格不明遺構の一つから(2)号木簡が出土した。伴出遺物としては、青磁・染付・美濃等の陶磁器類、漆器・折敷・箸・曲物等の木製品等が出土している。

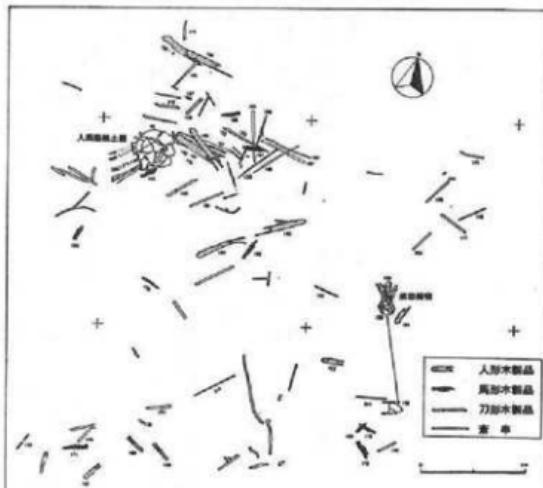
## 山形・俵田遺跡

たわらだ

1 所在地	山形県飽海郡八幡町大字岡島田字俵田
2 調査期間	一九八三年（昭58）四月～六月
3 発掘機関	山形県教育委員会
4 調査担当者	安藤 実・佐藤庄一
5 遺跡の種類	集落跡
6 遺跡の年代	八世紀～一世紀
7 遺跡及び木筒出土遺構の概要	<p>俵田遺跡は、山形県北西部にあたる庄内平野の北半に位置する。</p> <p>酒田市街より北東約7km、飽海郡八幡町大字岡島田字俵田を中心とした水田中にあり、遺跡の北西約1・8kmに国指定史跡城輪柵跡が所在する。</p> <p>調査は農村基盤総合バイロット事業に依るもので、第一次調査を一九七八年（昭53）に、第二次調査を一九八三年（昭58）に実施した。墨書のある人形等を出</p>

したSM6〇祭祀遺構は第二次調査で発見されたものである。

祭祀遺構は、約5m四方の範囲内に、人面墨描土器、須恵器小甕、木製の人形・刀形・馬形・畜牛などの遺物一二〇点が、祭場としての配置をほぼ原形のまま留めた形で検出された。これは本遺構が河



SM60祭祀遺構平面図

跡からごく近い場所にあったことを考慮すると、一時は祭場としての配置がなされたものが、その後の河の氾濫によって急激に埋められたために起こった稀な現象と考えられる。

墨書きは、人面墨描土器一点と、木製人形七点に認められる。墨書きのある人形は、すべて人面墨描土器の周辺から出土している。

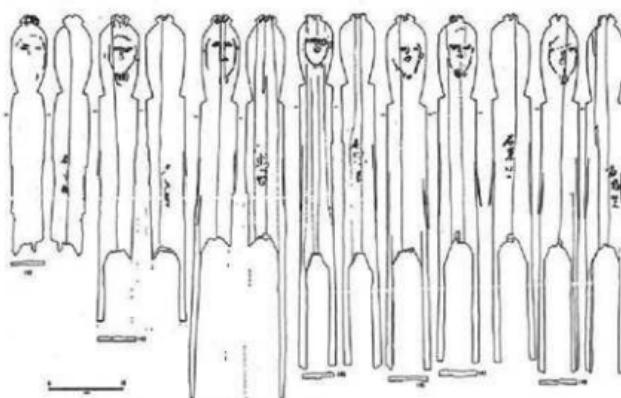
#### 8 木簡の篆文・内容



墨書きのある人形は、顔が倒卵形を呈し、肩の線が水平ないわゆる怒り肩になるものである。手の部分に切り込みがあり、股部は台形に切り込んだ後で折り取られている。表面にはすべて墨書きによって顎蓋を加えた顔の表現がなされ、裏面に三文字の墨書きが認められる。人面墨描土器にも「砾鬼坐」の墨書きが認められることから、人形裏面の三文字は、すべて「砾鬼坐」であった可能性が高い。

篆文については、「応」「イソニマシマス」と読んでいるが、上の二文字については「シキ」と読むことも可能である。

木製模造品の一部は、八世紀初頭に成立した大宝神祇令に規定さ



人形木製品

れた國家的祭祀と関連しており、その具体的内容は「延喜式」によつて一応知ることができる。同式の四時祭・祝詞の大祓条によるところ、穢を負わせた人形を四面のト部が祓所に解除することがみえてゐる。

本遺構の性格を考える場合、近郊にある出羽国府（城輪跡）との関連は見逃せない。官都を中心に行われていた祭祀が、地方行政機関を通じて次第に広まつていったと考えられており、地方行政の中心である出羽国府においても同様な祭祀が伝えられていたことがうかがえる。S.M.六〇祭祀遺構の時期は人面墨描土器の形態からみて九世紀中葉頃と推定されるが、現に嘉祥三年（八五〇）に、全国に先駆けて出羽国に陰陽師が派遣されているのである。

#### 9 関係文献

- 山形県教育委員会『俵田遺跡第2次発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財調査報告書第77集 一九八四年）
- 金子哲之「人形—古代・中世のひとがた」〔中世の呪術資料〕第四回中世遺跡研究集会レジューム 一九八四年）
- 佐藤庄一「俵田遺跡の祭祀遺構」〔えとのす〕第26号 一九八五年）
- 安部 実「山形県俵田遺跡第二次調査」〔日本考古学年報36〕一九八六年）

（佐藤庄一）

# 木簡研究 第五号

卷頭言——木簡史の研究について

関 晃

一九八一年出土の木簡

見

概要 平城宮・京跡 平城京二条大路・左京二条二坊十二坪 白毫寺遺跡 藤原宮跡 山田寺跡 阿部六ノ坪遺跡 長岡京跡(1)  
長岡京跡(2) 長岡京跡(3) 長岡京跡(4) 仁和寺南院跡 大坂城跡  
梶子遺跡 道場田遺跡 野畠遺跡 穴太遺跡 下野國府跡 下野  
国府跡寄居地区遺跡 長原東遺跡 多賀城跡 扇橋跡 日野川  
朝宮橋下流 桜町遺跡 出合遺跡 辻井遺跡 助三烟遺跡 肩脊  
堀之内遺跡 草戸千軒町遺跡 田村遺跡 高畠庵寺 藤田遺跡  
一九七七年以前出土の木簡(五)

藤原宮跡

字訓史資料としての平城宮木簡

——古事記の用字法との比較を方法として——

平城宮出土の衛士關係木簡について

木簡とコンピュータ

書評・『草戸千軒——木簡——』

小林 芳規  
鬼頭 清明  
田中 琢  
水藤 真

論報

頃価 三五〇〇円  
平四〇〇円

向日市文化資料館発行

### 『よみがえる古代の文字

——近畿出土の文字資料が語る都城・都衙・寺院・集落——

一九八六年一〇月～一月に開催された特別展示の図録。近畿を中心を集めた墨書き器・木簡・漆紙文書等発掘された文字資料のハンディな史料集になっている。

(B五版、三三頁、一九八六年一〇月、価値三〇〇円、  
二〇〇円、  
〒617 京都府向日市寺戸町南垣内四〇の一 向日市文  
化資料館)

# 木簡研究 第六号

卷頭言——記紀批判と木簡

直木孝次郎

## 一九八三年出土の木簡

概要 平城宮・京跡 平城京二条大路・左京二条二坊十二坪 平  
城京左京八条三坊十一坪 東大寺仏龕屋下層遺構 藤原宮跡 長  
岡宮・京跡 平安京右京八条二坊 定山遺跡 水走遺跡 津堂遺  
跡 高宮遺跡 池上・曾根遺跡 万町北遺跡 山垣遺跡 福成寺  
遺跡 沢田宮谷遺跡 長尾沖田遺跡 小川城遺跡 道場田遺跡  
宮久保遺跡 鹿島湖岸北部条里遺跡 東光寺遺跡 北大堂遺跡  
猿脇遺跡 北糸付遺跡 鯉沼東Ⅱ遺跡 下野國府跡 多賀城跡  
一乘谷朝倉氏遺跡 近岡遺跡 曾根遺跡 前田遺跡 美作國府跡  
草戸千軒町遺跡 尾道遺跡 芳原城跡 大宰府跡

## 一九七七年以前出土の木簡（六）

平城宮跡（第三三次）

平安時代の日記にみえる木簡

日本古代の人口について

『木簡研究』一～五号総目次

山田 英雄  
鎌田 元一

頃価 三五〇〇円  
平四〇〇円

福井・日野川朝宮橋下流出土の木簡補訂

本誌第五号で報告した、福井県丹生郡清水町日野川朝宮橋下

流出土の木簡は

・「象馬牛<sub>車</sub>登<sub>馬</sub>□車乘田業僕僕人□衆多」

・「出入息利乃□□□□□□□□□□□□」

と軽読したが、これは妙法蓮華經卷第二妙法蓮華經信解品第四に見える偈中の一節

象馬牛<sub>車</sub> 登<sub>馬</sub> 田業僕僕人 衆多

出入息利 乃過他國 商估賈人 無處不有

を記したものであることが判明した。

(福井子)

## 木簡研究 第七号

卷頭言——力の文

土田直綱

- 一九八四年出土の木簡
- 概要 平城宮・京跡 平城宮跡 奈良女子大学構内遺跡 法貴寺遺跡  
 藤原宮跡 長岡京跡(1) 長岡京跡(2) 長岡京跡(3) 百々遺跡  
 今里遺跡 平安京左京八条三坊二町 平安京左京九条二坊十三町  
 水走遺跡 西ノ辻遺跡(1) 西ノ辻遺跡(2) 坪井遺跡 忍ヶ丘駅前遺跡  
 訪跡 普賢寺遺跡 大鹿北遺跡 軽里遺跡 男鹿波藤市遺跡 沢田寺遺跡  
 道場遺跡 道場塙田遺跡 新方遺跡 川岸遺跡 倉見遺跡 前東代遺跡  
 赤堀城跡 朝日西遺跡 清洲城下町遺跡 寺掛城跡 吉田城三ノ丸  
 跡 覆瓦遺跡 秋合道路 球磨郡・元宮川遺跡 北条泰時  
 跡 千葉地更遺跡 千葉地更遺跡 蔵屋敷遺跡 小畠田遺跡  
 大津城跡 上永原遺跡 野々宮遺跡 野瀬遺跡 小谷城城下町遺跡  
 尾上遺跡 北方田中遺跡 水田遺跡 舛懶B遺跡 御前清水遺跡  
 仙台城三ノ丸跡 市川橋遺跡 多賀城跡 比川熊遺跡 大浦遺跡  
 扇田相跡 馬場屋敷遺跡 百間川当麻遺跡 鹿田遺跡 草戸千軒町遺跡  
 西庄Ⅱ遺跡 井上裏師堂遺跡 荒堅目遺跡

一九七七年以前出土の木簡(七)

平城宮跡(第三十九次)

公式様文書と文書木簡

中國における最近の漢簡研究

英國出土のローマ木簡

本簡史料紹介—牛札—

価額 三八〇〇円

二十四〇〇円

早川庄八  
大庭脩  
田中琢  
石上英一

文字資料でサマーセミナー

去る七月二十四日と二六日、第一回古代史サマーセミナーが栃木県鹿沼市で開かれた。その中で「在地社会と文字資料—東国を中心として—」と題して、関東地方の文字瓦・墨書き土器・漆紙文書・木簡を題材とした報告が九本準備され、レジュメ集が作られた。

## 『平城宮木簡 四』の刊行

平城宮跡出土木簡の正報告書としての第四集が刊行された。対象となるのは昭和四一年に宮の東南隅で実施された第三三次補足調査で出土した木簡である。同調査では宮の南を限る大垣の北を流れる東西溝から一万二千点をこえる大量の木簡が出土した。南層がその大半を占めるとはいえ、式部省で行われる考課・選叙の關係木簡がまとまって出土している。すでに『平城宮発掘調査出土木簡概報』の中に枳文の一部が略報告されているが、その正報告書にある。同調査の一万余点余の木簡を一冊でまとめるることは困難なため、三分冊に分けて刊行することとなり、「平城宮木簡 四」はその第一分冊である。約二千五百点の木簡の写真図版と別冊の「解説」よりなり、「解説」には遺構の概要・考選木簡の分析・枳文等が掲載されている。

奈良国立文化財研究所発行

(コロタイプ 国版 一二〇枚 解説 A5版・本文 四四  
頁 一九八六年三月刊 領価二十五、〇〇〇円、〒一、五  
〇〇円 解説のみ三、六〇〇円、〒四〇〇円)

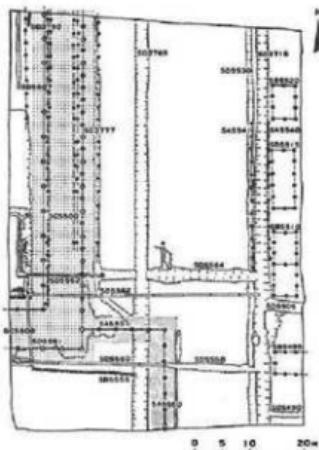
奈良市橋本町三六番地 緑明新印刷

奈良・平城宮跡（第四一次調査）

- |   |               |                     |
|---|---------------|---------------------|
| 1 | 所在地           | 奈良市佐紀町              |
| 2 | 調査期間          | 一九六七年（昭42）七月～一月     |
| 3 | 発掘機関          | 奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部 |
| 4 | 調査担当者         | 杉山信三                |
| 5 | 遺跡の種類         | 宮殿・官衙跡              |
| 6 | 遺跡の年代         | 奈良時代～平安時代初期         |
| 7 | 遺跡及び木簡出土遺構の概要 |                     |
- 第四一次調査地は平城宮第一次大極殿院築地回廊東南隅付近で、  
第一次朝堂院区画施設との接合部を含む地域である。面積は四二〇  
〇坪である。

検出した主な遺構は、大極殿院東面築地回廊SC五五〇〇、南面  
築地回廊SC五六〇〇、朝堂院の東北隅部分を区画する獨立柱屏で、  
後に築地に改作されるSA五五五〇・五五五一、宮内基幹排水路の  
南北溝SD三七六五、SD三七六五を東に移動して設けられた南北  
溝SD三七一五、SC五五〇〇の西側雨落溝SD三七九〇、東側雨  
落溝SD五五七五、SD五五七五から南東に流れてSD三七六五に  
注ぐSD五五八四、大極殿院内の排水を受けSC五六〇〇を横断す  
る暗渠SD五五五六、SD五五五六から東へ折れSD三七六五に流

入する暗渠SD五五五五、SD五五五六を改作したSD五五六一、  
SD五五六一から東へ折れる暗渠SD五五六〇、SD五五六〇から  
東へ延びてSD三七一五に流入する開渠SD五五五八、SC五五〇  
〇を横断しSD三七一五に排水する東西暗渠SD五五六一、SD五  
五六二の北で同じくSC五五〇〇を横断する暗渠SD五五六三、S  
D五五六三から東へ延びてSD三七一五に流入する開渠SD五五六  
四、第二次大極殿・朝堂院地域からSD三七一五に流入する東西溝  
SD五四九〇・SD五五〇五などである。このうちSA五五五〇・  
五五五一は雲龜頭以降に設けられ、それに伴いSD三七六五が東に  
移動しSD三七一五となる。



木簡が出土したのは、SD三七六五、SD三七一五、SD三七一五の西岸にあり、同溝よって破壊されている土壙SK五五三五、SD五五六四、SD五四九〇の五カ所である。

SD三七六五は幅一・六×一・六m、深さ〇・六mで、木簡から和銅年間に存在したことがわかる。一点出土したが断片が多い。

SD三七一五は幅二・三m、深さ一mで、堆積土は上下二層に大別できるが、水流のためか乱れがあり、層位による時期・内容の区分はできない。七六五点出土したが上層からの出土が多い。木簡の年紀から溝が靈亀頃から奈良末まで存続したことがわかる。

SK五五三五は幅一・八m、深さ〇・三mの不整形の土壙で、靈亀元年（七一五）銘のあるものを含む一七点の木簡が出土した。

SD五五六四は幅一・三m、深さ〇・六mで、堆積状況からするとSD三七一五が逆流した形跡があり、木簡の性格もSD三七一五のものと同類とみなしうる。八点出土した。

SD五四九〇は幅一m、深さ〇・二mある。木簡は七三点出土し

たが判読不能のものが多い。

## 8 木簡の表文・内容

SD三七一五から内容的に興味深いものが多數出土しているが、その中では兵衛府・中衛府に関するものが注意される。兵衛府から中衛府に宛てたものがあるので、中衛府あるいはその関連の官衙・施設で廃棄されたとみられる。人名を列記したものがあるが、中衛

の交名であろうか。中衛府は神亀五年（七二八）から大同二年（八〇七）まで存続し、内裏周辺の警衛や供奉に従つていたとみられるので、木簡が廃棄地点からあまり流下していないとすれば出土地近辺に中衛府の結所的施設のあった可能性が考えられる。

付札では貢進物荷札は少なく、海産物等の食料品の物品付札が多い。出土場所からみて内裏などでの宴会用の食料品であったかもしれない。

このほか『統日本紀』神護景雲三年六月乙巳条の任官記事とほとんど一致する記載のあるものが注目される。

年紀の知られるものは神護景雲三年が右記のものを含め三点、宝亀元年が一点あり、他の木簡もこの時期頃のものとみて矛盾しない。

### 溝SD三七六五

#### (1) 和銅□

（2）「一之郡末滑海×

（3）□以前等三物

（81）×17×4 659

691

#### （4） ■「更級郡」

□□忍麻呂前

・誰人□「誰□」

（140）×12×4 651

(5)

□□□□□魚八斤五兩

(117)×6×4 081

(6)

・「請細參拾了 右為付御馬并夜行馬所請  
・如件 神護景雲三年四月十七日番長非淨派」

333×53×4 011 \*

兼SD三七一五

(6)

兵衛府移中衛□  
〔府々〕

081

(7)

・「兵衛等充行夜使如件

081

(7)

・×衛府移 中衛府

一番正八位下  
〔費或々〕

080

・「真電列 □部真神 物部老」

152×13×4 011 \*

・×□仍故移

(182)×11×3 081 \*

(8)

・「阿奈石□ □□人合四人」

333×53×4 011 \*

(9)

・「式部大

〔輔大伴益立〕

伊賀守伊勢子老

遠江介藤井川守

出雲□  
〔守布々〕

081

内倉介安  
〔危〕草万呂

美野守石上息繼

周方守弓削秋万呂

兼勢  
〔人主〕

伊予守高円広  
〔批々〕

下総員外  
〔介々〕

桑原王  
〔兼々〕

081

・「下野介當

〔麻王〕

伊伎守

守田部息万呂

右兵衛  
〔方〕

081

能登  
〔守石川人麻呂〕

左馬司頭卒  
〔都支々〕

右大舎人介  
〔文尾々〕

081

員外介  
〔弓雨應〕

右衛士晉備泉

玄蕃  
〔助〕相模波  
〔伊波々〕

343×37×3 011 \*

1977年以前出土の木簡

(12)	・「諸酒老斗伍升□」 〔特販書司〕〔諸 <sup>タ</sup> 〕 (62)×(62)×2 061
(13)	半大初位上若湯坐 □ □
(14)	「少志」 薪取 〔人 <sup>タ</sup> 〕 □ □
(15)	「仕丁合拾五人□」 〔人 <sup>タ</sup> 〕 □ □
(16)	造花所□□□□□飯參斗陸升 〔人 <sup>タ</sup> 〕 六月六日雀部石麻呂 (175)×25×2 061
(17)	「厨 請飯□」 〔依貢 <sup>タ</sup> 〕 □ □
(18)	四月□□
(19)	・「比 葛木毛人 余□」 □少風從七上輕部造兄 〔万 <sup>タ</sup> 〕 (152)×11×3 061
(20)	主稅大允船 〔住 <sup>タ</sup> 〕 □田益足 凡河内小成 〔住 <sup>タ</sup> 〕 (61)
(21)	民金麻西 □ □
(22)	・□ 合四人 □ □ □ □
(23)	□少風從七上輕部造兄 〔万 <sup>タ</sup> 〕 (61)
(24)	四月廿四□□□東万呂附 〔日 <sup>タ</sup> 〕〔廿 <sup>タ</sup> 〕 (178)×(29)×3 061
(25)	景雲三年八月廿四□□□ (303)×(50)×5 061

右京一条三坊   
(并内)

091

飛驒國 

(111)×(10)×2  
081

「尾張國」  


「藤原高文作鮑一塊」

102×50×3  
051

「調塙」  


(65)×20×3  
019

「薄鹽舟七斤五兩」  


170×35×5  
031 \*

「△進上錢一百卅文」

「蒸鮑壳籠」  


148×24×3  
051 \*

「△丹比宅印」

「蠟燭三籠」

160×24×3  
051 \*

「□田部稻人 大伴

「蓆魚榮割一籠」

130×25×3  
051 \*

「×伴小刀良 鳴」

「蓆魚脂」

106×21×3  
051

「□」

「△押牛魚上△」

61×14×3  
031 \*

「□足」

「△鹿六」

68×27×3  
032 \*

「×人 合十」

「△伊知比古」

57×20×3  
032 \*

「□外衛府」

「△乃止淨麻呂乃官」

(102)×(30)×3  
061

「△△△△」

「△足德徳徳鳳至」

「△足德徳徳鳳至」

「△△△△」

「△△△△」

「△△△△」

「△△△△」

「△△△△」

「△△△△」

「△△△△」

「△△△△」

「△△△△」

(56)×16×3  
019

119×30×13  
011

1977年以前出土の木簡

清SD五四九〇

206×20×4 032

「惣保郡一斗九升」

飯飯飯  
〔飯〕

請〔飯〕  
〔飯〕  
四升四合

奈羅〔列六〕  
〔飯〕

英多郡

飯飯  
〔飯〕

□支部力一斗五升□□□□

(96)×20×4 059

・天山司解 進上飛炎卅九枚

飯飯  
〔飯〕  
三升

口面255-262, 高さ15 061

「勘了」

(236)×38×4 061

土壤SK五五三五

〔御曹司〕中

(151)×(16)×4 061

〔御曹司〕中

(30)×(15)×4 061

9 関係文献  
奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報報告』(一九八一年)  
同『奈良国立文化財研究所年報一九六八』(一九六八年)  
(加藤 慶)

土壤SK五五六四

〔去勝宝九歳〕

69×19×3 061

・「奈良□□五」

一升人給□□□〔升〕又□□

「煮海鼠」

127×17×2 061 \*

## 『平城京左京三条二坊六坪

発掘調査報告』の刊行

現在、奈良市庁の南西約200mの所に復原・整備されている特別史跡・宮跡庭園の発掘調査報告書が刊行された。調査は昭和50～59年までの間に行われ、総面積6600坪に及ぶ。京内の一坪の様相が明らかになるとともに坪の中央に屈曲した石組の園池が発見され、奈良時代の庭園の実例として貴重な遺跡である。発掘調査では一〇二点の木簡が出土しており、和銅年間の貢進物の荷札や、「北宮」「竹野王子」「御坏物」「中務省」など注目すべき語句を記す木簡が多い。特に「北宮」は長屋王室の吉備内親王邸と考えられ、古代史研究においても興味深い内容をもつものといえる。奈良国立文化財研究所『平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告』『平城宮発掘調査出土木簡概報』(5)・(6)などに略報がされているが、本報告ではそれらをまとめ、一点ごとに解説を付けており有益である。

奈良国立文化財研究所

『平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告』

(A4版・本文一一六頁・図版四〇枚・一九八六年三月刊)

頃価 四、五〇〇円 〒四五〇円 真陽社

### 「払田柵跡I—政庁跡—」刊行される

秋田県仙北郡仙北町にある、古代城柵跡として知られる払田柵跡の政庁地区部分の正式報告書が刊行された。扱っているのは一九七七年から八三年までに実施した第二・一三・二八・三五・四七・五三次および補足調査である。これらの調査の結果、払田柵跡は外郭、内郭と政庁跡の複雑構造をなしていることや、政庁の構造・変遷などが明らかとなつた。

内容は、第一章 遺跡の概要、第二章 扟田柵跡をめぐる研究史、第三章 調査の経過と記録の方法、第四章 遺構、第五章 遺物、第六章 考察、第七章 結語、別編、付図、からなる。「別編」には、木簡二三點をはじめ、多數の墨書・刻書き器などを収録した「出土文字集成」と「払田柵跡関係文献目録」がおさめられている。

秋田県教育委員会払田柵跡調査事務所編集、秋田県埋蔵文化財振興会発行、三〇五頁、額価五、五〇〇円、平五〇〇円

## 木簡学会会則

第一条 本会は木簡学会と称する。

第二条 本会の事務所は奈良県内に置く。

第三条 本会は木簡に関する情報の蒐集・整理し、木簡そのものについての研究・保存を推進するとともに、その成果の普及をはかり、史料としての活用に資することを目的とする。

第四条 本会は前条の目的を達成するため、つきの事業を行う。

1 木簡に関する情報の蒐集および整理

2 研究集会の開催

3 会誌『木簡研究』その他の刊行

4 発掘調査組織、その他関連する学会・機関との連絡および協力

5 その他前条の目的を達成するために必要な事業

第五条 木簡の調査・研究に従事し、本会の趣旨に賛同する者は会員になることができる。

二 本会に入会しようとするものは、会員二名の推薦を必要とし、委員会の承認を得なければならない。

三 会員は所定の会費を納入しなければならない。会費の額は総会において決定する。

四 会員は総会における議決権を有し、会誌の配布をうけ、そ

の他の前条の事業に参加することができる。

五 会員に本会の目的の遂行をさまたげる行為のあった場合には、委員会はこれを除名することができる。

第六条 本会は次の役員をおく。

1 会長一名

2 副会長二名

3 委員若干名

4 監事二名

第七条 委員・監事は総会において選出され、任期は二年とする。

ただし、再任はさまたげない。

二 委員は委員会を組織し、会則にもとづき会務を処理する。

三 会長および副会長は、委員会の互選による。会長は本会を代表し、会務を統括する。副会長は会長を補佐する。

四 監事は会計および会務の執行を監査する。

第八条 本会は毎年一回総会を開く。

第九条 本会の経費は会費および寄付金をもってて、総会において会計報告を行うものとする。

第十条 この会則の変更は総会において議決するものとする。

第十二条 委員会は会務運営のため、幹事若干名を委嘱し、また細則を定めることができる。

## 彙報

### 第七回総会および研究集会

木簡学会第七回総会と研究集会は、一九八五年一二月七日・八日

両日、奈良国立文化財研究所平城宮跡資料館講堂において、約一四

〇名の参加者を得て開催された。会場には平城宮跡、平安京跡、袖井遺跡(三重)、西河原森ノ内遺跡(滋賀)、神明原・元宮川遺跡(静岡)等出土の木簡や、飛鳥京跡出土木簡の写真が発掘関係機関の協力を得て展示され、関心をよんだ。

◇一二月七日(土)(午後一時半五時三〇分)

### 第七回総会(議長 林紀昭氏)

最初に岸俊男会長が挨拶に立ち、情報収集に関する会員の協力

要請と、保存処理の重要性に対する提言があったあと、林紀昭氏

を議長に選出して議事に入った。

会務・編集報告(鬼頭清明委員)

一年間の活動と現状につき、会員は新人会員一七名を加えて二〇八名となったこと、会誌七号の編集状況、七号の売価を一冊三八〇円、送料四〇〇円と決定したこと等の報告があり、承認された。

会計報告(岩本次郎委員)  
一九八四年度の取支について説明があり、ひきつづいて閑見監事より会計執行は正当である旨の会計監査報告があつて、異議なく承認された。

研究集会(司会 犬野久氏)

### 中国簡牘研究の現状

木簡と紙との接点

李氏の発表は本誌に収載した。藤枝氏の発表は、歐州所在の教

煌・トルファン資料の調査をふまえ、木簡と紙の使い分けや木簡と写経の寸法との共通点を論じられたものである。

研究集会終了後、グリル友楽で懇親会が開かれた。

◇一二月八日(日)(午前九時半午後三時三〇分)

### 研究集会(司会 佐藤宗厚・原秀三郎氏)

#### 一九八五年出土の木簡

#### 袖井遺跡出土木簡補考

#### 飛鳥京跡出土の木簡

#### 鶴田博・岸俊男

#### 榮原永造

#### 館野和己

館野報告は、一九八五年に出土した木簡と八四年以前出土で未報告の木簡をとりあげたものである。榮原報告については本誌を参照されたい。なお鶴田報告に隣連して、参加された関係者から、神明原・元宮川遺跡(静岡)、西河原森ノ内遺跡(滋賀)、平安京、下野国府(桶木)についての追加報告があつた。

昼休みをはさんで行われた龟田・岸報告は、『日本書紀』天武・持統紀の記事に関連するとして話題を呼んだ木簡に関するものである。

各報告については、いずれも活発な質疑討論があり、總括討議で締めくくった。また昼休みには、平城宮第一六九次の調査で出土した大嘗宮の遺構を見学した。最後に平野副会長より挨拶があり、参加者への謝辞とともに、新入会の申込みは九月末までに手続きを終えてほしいこと、一層の情報収集をめざすべきことなど

#### 委員会報告

##### ◇一九八五年一二月七日（土） 於奈良国立文化財研究所

総会に先立ち、新入会員四名の承認、会務・編集の状況、総会・研究集会の運営等について検討が行われた。席上、新入会の申込みは九月末必着、一〇月の委員会で承認の運びとし、一二月の委員会では新入会員の承認を議題としないことが決定された。また各地で情報収集にある人材を確保することが話題となつた。

##### ◇一九八六年六月五日（木） 於奈良国立文化財研究所 新入会員九名の承認、一九八五年度の会計報告の他、『木簡研究』八号の編集、八六年度総会・研究集会の予定について討議した。

##### ◇一九八六年一〇月二七日（月） 於奈良国立文化財研究所

新入会員四名の承認、会務の現状、一九八五年度の会計、八六年度前半の会計、会誌八号の編集状況、総会・研究集会の日程等が討議された。また次期委員についても検討され、六五歳定期年を実施し、委員が在任中六五歳に達した時は任期切れを以て引退するという方向で議論された。また地方公共団体保管の木簡については、優遇すべき保存状態にあるものもみられるので、早急に学会として対策に取り組んでゆくことが確認された。

PROCEEDINGS OF JAPANESE SOCIETY  
FOR THE STUDY  
OF WOODEN DOCUMENTS

NO. 8 1986

CONTENTS

Forward—The Work that should be Survived in Eternity	Kazuo Aoki..... i
Wooden Tablets Excavated in 1985.....	1
Outline	
Explanatory Notes	
Nara Palace Site, Nara Prefecture; Remains of Nara Capital Eastern 3rd Ward on 6th Street, Nara Prefecture; Remains of Nara Capital Western 1st Ward on 7th Street, Nara Prefecture; Nagaoka Capital Site (1), Kyoto Prefecture; Nagaoka Capital Site (2), Kyoto Prefecture; Nagaoka Capital Site (3), Kyoto Prefecture; Remains of Kyoto Capital Eastern 3rd Ward on 3rd Street, Kyoto Prefecture; Remains of Kyoto Capital Eastern 1st Ward on 6th Street, Kyoto Prefecture; Remains of Kyoto Capital Eastern 3rd Ward on 9th Street, Kyoto Prefecture; Remains of Kyoto Capital Western 2nd Ward on 8th Street, Kyoto Prefecture; Remains of Kyoto Capital Western 2nd Ward on 8th Street, Kyoto Prefecture; Remains of Toba-rikyu, Kyoto Prefecture; Fushimijo Castle Site, Kyoto Prefecture; Remains of Nishinotsuji, Osaka Pre- fecture; Remains of Kannonji, Osaka Prefecture; The Temple Site in Inukaido, Osaka Prefecture; Remains of Hozumi, Osaka Prefecture; Remains of Tamatsu-Tanaka, Hyogo Prefecture; Remains of Tsuji, Hyogo Prefecture; Remains of Nagao-Okita, Hyogo Prefecture; Pre- sumptive Remains of Tajima-kokufu, Hyogo Prefecture; Remains of	

Asahi-nishi, Aichi Prefecture; Remains of Obuchi, Aichi Prefecture; Kutsukakejo Castle Site, Aichi Prefecture; Katsumatajo Castle Site, Shizuoka Prefecture; Remains of Shinmebara-Motomiyagawa, Shizuoka Prefecture; Remains near Imakoji Street, Kanagawa Prefecture; Remains in Tsurugaoka-Hachimangu Shrine, Kanagawa Prefecture; Remains of Kashima, Ibaraki Prefecture; Remains of Nishigawara-Morinouchi, Shiga Prefecture; Remains of Kangakuin, Shiga Prefecture; Kongojijo Castle Site, Shiga Prefecture; Remains of Kakyudo, Shiga Prefecture; Remains of Hokaiji Temple, Tochigi Prefecture; Imaizumijo Castle Site, Miyagi Prefecture; Remains of Paddy Fields in Tomizawa, Miyagi Prefecture; Remains of Chusonji Temple, Iwate Prefecture; Isawajo Castle Site, Iwate Prefecture; Namiokajo Castle Site, Aomori Prefecture; Remains of Tawarada, Yamagata Prefecture; Akita Castle Site, Akita Prefecture; Remains of Tsukumobashi, Fukui Prefecture; Remains of Ichijodani, Fukui Prefecture; Remains of Miki-Daimon, Ishikawa Prefecture; Yuminoshijo Castle Site, Toyama Prefecture; Remains of Banba, Niigata Prefecture; Remains of Ojimanishi, Niigata Prefecture; Todajo Castle Site, Shimane Prefecture; Remains of Kusadosengencho, Hiroshima Prefecture; Remains of Onomichi, Hiroshima Prefecture; Remains of Bingo-kokufu, Hiroshima Prefecture; Remains of Akizuki, Wakayama Prefecture; Remains of Dazaifu, Fukuoka Prefecture; Re- mains of Dazaifu-jobo, Fukuoka Prefecture; Remains of Buzen-kokufu, Fukuoka Prefecture; Remains of Nehoji Temple, Fukuoka Prefecture;	105
Wooden Tablets Excavated before 1977 (8).....	105
Nara Palace Site (14th Excavation), Nara Palace Site (25th Excavation), Nara Palace Site, Nara Palace Site (40th Excavation), Nara Palace Site (41st Excavation), Nara Palace Site (43rd Excavation), Remains of Toshodaiji Temple,	
New Studies of Wooden Documents in China.....	Li Xueqin... 123
New Studies of Wooden Documents in China (in Japanese)	
.....Translated by Fuminori Sugaya...	128
A Study of Sosatsu and Sakka.....	Hidesaburo Hara... 135
Reexamination of Wooden Tablets Excavated from Remains of Yui	
.....Towao Sakachara...	151
Excavated Scripts and their Reference to the Common People of Medieval Japan .....	Shigeto Shidahara... 163

*Published by*

JAPANESE SOCIETY

FOR THE STUDY OF WOODEN DOCUMENTS

一九八六年十一月二十日 印刷  
一九八六年十一月二十五日 發行

平630

編集免行

木  
簡  
學  
會

印  
刷

京都市下京区油小路弘光寺上ル  
眞陽社

ISSN 0912-2060



